talk! talk! talk! 女優・中村麻美さん

女優
中村麻美さん
16歳のときに映画の主演女優として衝撃的なデビューを飾った女優・中村麻美さん。個性的なキャラクターを多く演じ、強烈な印象を与える演技派として若手女優の中でも異彩を放つ存在である。
仕事の話をすると瞳を大きく開き、「楽しい！」と語る中村さん。今回は、趣味の写真のことはもちろん、役づくりの話から今後の目標まで、女優としての思いをたっぷりと語っていただいた。

プロフィール
なかむら・まみ。1979年、神奈川県横浜市生まれ。1995年、16歳のときに、映画『ファザーファッカー』の主演オーディションに応募、約4000人の応募者の中から選ばれ女優デビュー。以後、映画を中心に、テレビドラマ、CMなどでも幅広く活躍を続ける。おもな出演映画は、『富江』『御法度』『東京ゴミ女』『白い船』『火星のカノン』など。テレビドラマでは『ストレートニュース』（NTV系）『君の手がささやいている』（テレビ朝日系）『ストロベリーオンザショートケーキ』（TBS系）『ハンドク!!!』（TBS系）など。
趣味は写真の他に、旅行、ドライブ、乗馬、水泳、脚本を書くこと。2000年には自ら書いた脚本で、短編映画の監督をし、多岐にわたる才能を発揮。また今年は串田和美演出の舞台、「スカパン」で初舞台を踏み、新たな挑戦を続けている。今後、2本の出演映画の公開を控えている。「女はバス停で服を着替えた」は、2003年3月15日より、吉祥寺バウスシアター、渋谷ユーロスペースにて公開予定。「星に願いを。」は、2003年4月より全国東宝洋画系で公開予定。

映画の主演で女優デビュー 『辛いよりも、とにかく楽しかった』

女優を目指そうと思ったきっかけから教えていただけますか？

両親が大の映画ファンで、小さい頃からいろいろな映画に触れてきました。そんなある日『羊たちの沈黙』（※注1）を家族で見たときに、主演のジョディー・フォスターのものすごく力強い目に惹かれ、「女優としても、ひとりの女性としても、なんてかっこいいんだろう」と思ったんです。作品に引き込まれたというより、その演技に衝撃を受けたんです。そのとき「自分もこうなれたらなぁ」と思ったのが、女優を目指そうと決心したきっかけです。

オーディションに合格されて、女優デビューと映画初主演が決まったんですね。

そうです。女優になろうと決めてからは、毎日のようにオーディション雑誌を見ていろいろと調べました。絶対に映画で女優デビューするんだという強い思いはあったのですが、どのオーディションもピンとこなかったんです。ところが高校1年の夏に"『ファザーファッカー』主演女優募集"という記事を見つけて、ほとんど直感で、「ああ、これだ！」って思ったんです。

この映画の原作は、内田春菊さんの自伝として当時ベストセラーになりました。かなり衝撃的な内容だと思いますが、この作品のどのようなところに惹かれたのですか？

たしかに衝撃的なストーリーだと思いました。でも主人公は、どんなに辛い境遇におかれても、すごく強い意志を持って立ち向かっているんです。その姿が、女優になりたいという強い意志を持っていた自分とシンクロしたのだと思います。だから、この役は絶対私がやる、何が何でも受かってやる！　という気持ちでオーディションを受けたんです。

はじめての映画撮影は、いかがでしたか？

はじめての経験でしたので、やはりプレッシャーはありました。撮影が進むにつれてたまっていくストレスを、食べる事で紛らわせていたために、撮影途中なのにすごく太ってしまって……。だけど、それでもすごく楽しかったんですよ。演じることが楽しくて楽しくて。

プレッシャーの重さを差し引いても？

そうです。それと、すごく強気だったんです。どんなにきついシーンでも、私は絶対に負けないんだという気持ちを絶えずもちながら撮影に臨んでいました。

※　注1　『羊たちの沈黙』（1991・米）＝1991年度のアカデミー賞主要5部門を独占したサイコサスペンスムービー。猟奇的な連続殺人事件の捜査に加ったFBI研修生クラリスと、捜査の協力を頼む元精神科医の殺人鬼レクターの奇妙な関係。そこに、彼から得たヒントをもとに真犯人を追うストーリーが複雑にからみ合い、恐怖と緊張感を強烈に印象づける名作として現在も人気が高い。

『白い船』で見せたナチュラルな演技　役づくりは「何も考えずに子供と遊ぶこと」

中村さんは『富江』（※注2）『東京ゴミ女』（※注3）『火星のカノン』（※注4）など、演じる上で一筋縄ではいかないような、個性的な役を多く演じていらっしゃいますが、役づくりはいつもどのようにされているのですか？

まず脚本を読んで、台詞から感じ取ったものをガーっと箇条書きで書き出していくんです。"青い空"とか、"クサイ台詞"とか、本当に他愛もないことなんですけどね。あと、絵を描いたりもします。コンテとまではいかないんですけど、イメージを落書きみたいな感じで描くんです。そうして、撮影に入る前にある程度のイメージを固めておくのです。

手を動かしながら役をつくり上げていくんですね

そうですね。頭で考え出すと自分にぐーっと入り込んでしまって疲れてしまうから、どこかで気を抜きながら、手を動かして遊びながら役づくりをするんです。
　それから、自分でその役の設定を考えて、作り込むのが好きなんです。『火星のカノン』という映画では、髪をボサボサにしたり、マニキュアを塗ったあとにわざと剥がして、２週間前に塗ってそのままといった雰囲気の爪を作ったりして、ボロボロの女の子というイメージを作りました。そういう作業をひとつひとつ行なうことで、役柄を演じる状態に自分の気持ちを持ってゆくのです。

2002年に公開された映画『白い船』では、これまでとは少し違った役柄にチャレンジされていますね。

そうなんです。はじめに『白い船』のオーディションの話をいただいたときびっくりしました。まず『白い船』っていうタイトルからして、今までと違う！って（笑）。いわゆる"感動もの"の映画はやったことがありませんでしたし、自分が学校の先生を演じることになるとは思ってもみなかったので。

静香先生という小さな学校の先生役でしたね。教師という仕事に自信をなくしながらも子供たちと向き合っていくという……。

まず脚本を読んでみて、ずいぶん気持ちのいい映画だなと思いました。それと妙に気に入ったシーンがありまして、そこを読んだときに鳥肌が立ってしまったんです。

どのようなシーンだったのですか？

静香先生が久しぶりに実家に帰ってきて、家の側の田園の中にたたずんで、風にふかれているシーンなんです。そのシーンで静香先生は、自信をなくしていた教師という仕事をまた続けて行こうと決心するんです。このストーリーの軸は、子供たちと白い船の交流を描くことにあるのですが、静香先生にとっては、そこが一番大事なシーンなんです。脚本を読んでいたらこのシーンの風景が浮かんできて、本当に風を感じたんです。オーディションの時に、監督にそのシーンのことを伝えたら、監督もそのシーンが一番好きだっておっしゃって、すぐに意気投合したんです。

実際に静香先生を演じてみていかがでしたか？

今回も、自分なりに考えてから撮影に臨んだのですが、どうもしっくりいかないままに撮影も中盤になってしまったんです。そこで、いったん自分の中にあったイメージを全て捨てることにしました。そして、イメージづくりの代わりに子供たちとサッカーや竹馬をして、毎日ドロドロになるまで遊んだり、暇があれば町を歩き回って地元の人と交流を持ったり、そうやってただ毎日を楽しく過すことにしたんです。

『白い船』（2002年　監督/錦織良成）
子供たちはある日、校舎の窓の外を通る白い船を見つける。仕事に自信をなくしていた女性教師と漁村の人々を巻き込みながら、あの白い船に乗りたいと行動を起こしてゆくが……。
島根県平田市の小さな漁村で起きた実話のエピソードを元に作られた、見る人に忘れかけていた素直な心を思い起こさせる感動のストーリー。

今までと違った役づくりのアプローチですね。結果的にうまくいったのですか？

いつも撮影が終った後にやっと役になれたかなって思うことばかりで、撮影中にうまくいったかと聞かれてもわからないんです。でも、風にふかれる田園のシーンを撮影したときに、あ、ちょっと静香先生が自分に近づいてきたな、もうちょっとこの役を続けることができそうだなって思うことができたんです。それはやはり、子供たちと一緒に遊んだという経験が大きかったのだと思います。

静香先生にとっても、中村さんにとっても転機となる重要なシーンだったのですね。

※　注2　『富江』（1998年）＝ホラー漫画界で実力、人気ともにナンバーワンと絶賛される伊藤潤二の人気コミック「富江」を映画化。死んでもなお再生を繰り返すという美女・富江にじわじわと追い詰められてゆく月子（中村麻美）の恐怖を描いたSFホラームービー。
※　注3　『東京ゴミ女』（2000年）＝愛する人のすべてを知りたいという思いから、同じマンションに住む男の捨てたゴミを拾って集めてしまうみゆき（中村麻美）を通して、不器用だけれども、どこかいとおしくなってしまうような女の子の日常を繊細に表現した青春映画。
※　注4　『火星のカノン』（2002年）＝30歳を目前にした絹子の実らない恋愛と、彼女に秘めた片思いをしている少女・聖（中村麻美）を通して描かれるリアルで切ない恋愛ストーリー。

写真を撮ったことによって　思いが昇華されてゆく

普段から、カメラを持ち歩いて撮っているそうですね。

ドライブが好きで、いろいろな所に行くんですが、そういうときには必ずカメラを持って行きます。

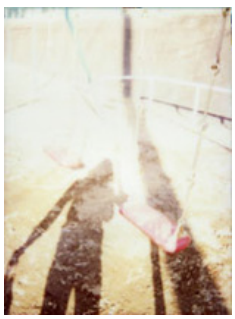
どういったものを撮影されるんですか？

そうですね……たとえば夕日とか朝日とか、その瞬間その場所にいてすごくきれいだと感じた風景などは、心の中にしまっておけばいいのであまり写真には残したいとは思わないのです。うまく言葉にはできないのですが、自分がそのとき感じていた気分、状態を切り抜きたいと思った瞬間に自然とシャッターを切っているという感じですね。

たとえば、この花の写真を撮影したときはどのような状況だったのですか？

『異物』

『本トに笑える日』



『ただいま・〜帰れる場所〜』

この時は、友達の家で楽しい話をしていました。天気も良くて、すごく気持ちいいなあと思っていたときに、ふとこの花が目に入ったのです。赤と緑のコントラストの華やかさがその時の自分にすごくフィットしてきれいに見えたので、この写真を撮りました。花を撮りたかったのではなくて、そのとき感じていたことがこれを撮ったことによって昇華されたような気がしました。

花がそのときの自身の気持ちを現しているように感じた。

そうです。たまたまそのときの楽しい気持ちと花が重なったのです。私にとって、写真はごく個人的なもので、自己満足の世界なんです。無駄に撮ることも多いですけど、そういう意味では1枚1枚に対しての思い入れは強いのかもしれません。

写真の面白さは　モノづくりをする感覚を味わえること

そもそも、カメラを持ち始めたのはいつ頃からなのですか？

カメラを持ちはじめたのは、高校生の頃だったと思います。いつのまにか持っていたという感じでした。カメラにはまったのは、以前映画の中で、カメラマンの卵の役を演じてからです。そのときにはじめて一眼レフカメラを持たせてもらったのですが、１ヶ月ぐらいいろいろなところで、役づくりの練習をかねて撮影させてもらったのですが、それがすごく楽しかったんです。現像も経験したのですが、画像が印画紙に浮かび上がってくるところなど、とても面白かったです。

難しさなどは感じませんでしたか？

いいえ、全然。そのときは本当に楽しくやらせていただきました。撮ったなかで気に入ったものを部屋に飾ったりもしました。以前、小さな写真展をやったこともあるんです。ラーメンを作って、沸騰して吹き出してしまったところを撮ったり、人からもらったメッセージや手紙を床にばーっと並べて撮ったり。自分でどういう写真を撮るか考えて、選んで、タイトルつけて、そういうことが楽しかったです。

『地図にはない水族館』

『クローバー』

役づくりに関しても感じたのですが、何かを作り上げていくという作業が好きなのですか？

『泣けない空』

大好き！　昔から、何か手を動かしたり考えたりすることが好きでした。学生のころは、授業もあまり聞いてなかったな。落書きをしたり、文章を書いたりしてましたね（笑）。だから、役に関しても、ちょっと変わった女の子の役を演じるのが好きです。自分では理解できないような役だからこそ、考えて演じるのが楽しいのです。でも、私の場合は必要以上に〝変わりもの〟に演じてしまう傾向があるんです。楽しくて、監督が全然求めている以上に、なんでも大袈裟にやってしまうんですよ。

写真も、モノづくりをするという感覚が楽しいのでしょうか？

そうですね。現像する作業などはまさにモノづくりをしている感覚ですよね。そう言えば、空き箱に穴をあけて、ピンホールカメラを作ったこともあるんですよ。東京タワーを撮ったのですが、それも楽しかったですね。

では、今回のインタビューもモノづくりの感覚で、お持ちいただいた写真にタイトルをつけて掲載するというのはいかがでしょう？

はい、いいですよ。でも、どうしよう！　タイトルを考えるのはすごく楽しい作業なんですけど、ぴったりの言葉を探し出すのって難しいですよ。きっとすごく時間がかかってしまうと思うのですが……1時間ぐらいお時間をいただいてもいいですか（笑）

「10年後もずっとスクリーンの中に映っていたい」

今後の目標を教えていただけますか？

そうですね……賞が欲しいですね（笑）。まだひとつも取っていないので、賞が欲しいです。

賞をもらうことをひとつの目標にしているのですか？

いえ、違うんですよ。賞を目標にしているつもりはまったくないです。実はひとつも取っていなかったなと思っただけなので……やっぱり賞はいりません（笑）。女優の仕事は自己満足でやっているので、誰かに認めてもらいたいとは思っていないんですよ。私の希望は、この仕事をずっと続けて、映画に出演し続けること。10年後も、スクリーンの中に映っていたいのです。でも、女優を続けていく過程で結果的に賞が取れたら、それはそれでうれしいですよ。

今後も、基本的には映画を中心に活動されていくのですか？

そうですね、やっぱり映画が好きですから。でも、テレビでも素敵な役に出会えれば、もちろんやりますよ！　先日までは舞台もやらせていただきました。

初舞台だったそうですね。いかがでしたか？

それが、毎日同じことをやるんですよ（笑）。当たり前なんですけど、映画はワンシーンを撮ったらもう同じシーンは撮影しませんよね。でも、舞台の場合は稽古からずっと同じことをやるのですから、毎日それが苦痛だったんです。ところがお客さんの前で演じてみると、毎日同じなんですが、実は毎回違うことができるんですよ。毎回、自分なりに遊びを入れ込みながらできるんです。それを知ったら今度は面白くて、面白くて。

お客さんの反応も、毎回違ってくるのですか？

そうなんですよ。その反応がまた楽しみなんです。舞台を経験してから、〝演じるって何だろう〟と改めて考えさせられました。生の舞台で、毎回演技を変えながら、演じるのもいいなと思いますし、逆に映画では、二度と同じシーンを撮ることができないからこその良さがありますし。今、〝演じることは何か〟に答えが出せなくて、すごく苦しい状態なんです。でも、だからこそ早く次をやってみたいと思えるんです。この苦しさがあるから女優を続けていけるのだと思います。

今後は、もうすぐ公開の映画が2本ひかえていますね。

『女はバス停で服を着替えた』は、美容師の役で、『星に願いを。』は看護士の役です。

先生に続いて、様々な職業の役にチャレンジしていますね。もし、女優という職業に就いていなければ、何になっていたと思いますか？

よく聞かれるんですが、他は絶対に考えられないですね。女優って本当に楽しいですよ！

今後も楽しみながら、仕事に趣味に、活躍の幅を広げていってください。今日はありがとうございました。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.